

# くまみる日和



運命の転校生





## 今日の星占い

第1話より、ほんの数日前。桜が咲く朝のことでした。

香月堂の朝。店の奥では、お父さんとお母さんが  
春の和菓子を作っています。

もなかは店先で、星と月の絵がついた本を開いていました。

「今日は、思いがけない“運命の出会い”があるかも。  
新しいご縁を大切に」

もなかは、その一文をじっと見つめました。

「今日、クラスに転校生が来るんだ」

「まあ。ほんとに運命かもしれないね」

お母さんが笑うと、もなかも少し照れくさそうに笑いました。



## 転校生は、みるく

朝のホームルーム。先生の隣に、ひとりの女の子が立ちました。

「みるくです。今日からお世話になります。よろしくお願いします」

静かな声と、きれいなおじぎ。

教室が、ふっとざわめきました。

「かわいくない?」「席、あそこかな」

とくに男子たちは、なんだか落ち着きません。

そんな声にも気づかないように、みるくは席へ向かいました。

もなかは、その姿をじっと見ていました。



## かるた向き？

休み時間。競技かるた部員のもなかは、つい選手を見るような目で、みるくを観察していました。

背筋の通った立ち姿。歩き出せば音も立てず、動きに無駄がありません。

声をかけられても、自分のペースは崩さない。

もなかは小さなメモ帳を開きました。

「姿勢よし。足運びよし。動じない……」

さらさらと書き込んで、小さくうなずきます。

「これは……競技かるたに向いている！」

まだ話したこともないのに、もなかの興味はどんどん膨らんでいきました。



## いったんスルー!?

すると今度は、男子たちが次々にみるくへ話しかけました。

「校内案内しようか？」

「ありがとう。でも、もう少し自分で見てみたい」

「昼、一緒に食べない？」「お弁当、持ってきたよ」

「放課後は空いてる？」「まだ決めてない」

笑顔で答えているのに、ひとつも約束していません。

もなかの目が光りました。

「好意は受け取る。でも、答えはすぐ渡さない……！」

「あれは恋愛テクニックの“いったんスルー”！」

もちろん、みるくにそんなつもりはありません。



## これ、落としたよ

---

みるくが歩いていったあと、足元に何かが落ちました。

桜模様の小さなハンカチ。

「あっ」

もなかは拾い上げ、みるくを追いかけてました。

「みるく、これ落としたよ」「ほんとだ。ありがとう」

「私、もなか」「知ってる。もなか、でしょ？」

「覚えてたんだ」

「うん。甘い名前だから」

「それ、みるくに言われたくないな」

ふたりは顔を見合わせ、ふっと笑いました。



## 季節を食べる

昼休み。ふたりはビオトープのそばでお弁当を広げました。

もなかは、最中をひとつ差し出します。

「これ、うちの香月堂の最中」

「もなかが、最中をくれるんだ」

「そう。こっちのもなかは食べていいよ」

ふたりで笑いました。

「私ね、和菓子って季節を食べるみたいだと思うんだ」

「季節？」

「春は桜。夏は青楓。秋は月で、冬は雪。味だけじゃなくて、  
形や色や名前でも季節を作れるの」

もなかの声がどんどん弾んでいきます。

「もなか、和菓子が本当に好きなんだね」

そのひとことが、もなかには少しくれしく聞こえました。



## 私の推し

---

「そうだ。みるく、『今日、月になります。』って知ってる？」

「知らない」

「えっ。じゃあ説明する！」

もなかは待ってましたと身を乗り出しました。

「私の推しは、あずしおカップル。清水あずきと、佐藤寿夫！」

「へえ」

「としおがさ、いいところまでいくのにそこで引くんだよ！」

もなかは両手を握ります。

「そこ引くのか～！もっと押さないと！」

「もなか、テレビ見ながらいつもそんな感じなの？」

「だって、としおの押しが弱いんだもん」

みるくは笑いました。

「応援するの、大変そう」「ほんと大変」

今度はふたりで笑いました。



## 放課後、来ない？

---

帰りの会が終わりました。

それでも、もなかにはまだ少し話したいことがありました。

それに——朝から確かめたいことも。

「私、競技かるた部なんだ。みるく、放課後、部室に来ない？」

「競技かるた？」

「うん。みるく、たぶん向いてると思う」

「なんで？」

もなかは少し笑いました。

「それは、見てから」

「じゃあ、行ってみる」



## 二階のいちばん奥

---

ふたりは第二校舎へ向かいました。

もなかは慣れた足取りで二階へ上がり、西の端で足を止めました。

「ここが、私の入っている競技かるた部」

入口には、木の看板がかかっています。

開いた入口の向こうには、畳の部屋が広がっていました。

「入って。競技かるた、見せるね」

みるくは小さくうなずき、もなかのあとに続きました。



## 運命戦

もなかは畳に座り、自分の前と、仮の相手の前へ、一枚ずつ札を置きました。

「最後に、こうしてお互いの陣に一枚ずつ札が残ることがあるの」

「どちらが先に読まれるかで勝負が決まる。それを——  
“運命戦”っていうんだよ」

もなかがまだ説明している途中で、みるくの手が、考えるより先に動きました。

まっすぐ、もなかの前の札へ。



## やってみたい

みるくは、取った札をじっと見つめました。

向かい側には、もう一枚の札が残っています。

「相手の札を取ったら……自分の札を相手に送れるの？」

「そう。自分の陣が空になるから、それで勝ち」

みるくの目に、ふっと光がともりました。

「私も、やってみたい」

「ほんと？」

もなかの顔が、ぱっと明るくなりました。

「じゃあ、これ。明日まで貸すね」

もなかは、百首と決まり字の本を、みるくの前へそっと滑らせました。



## もう友達かな？

---

下校の時間。

校門前のロータリーで、ふたりの帰り道は分かれました。

「じゃあ、また明日」

「うん。また明日」

みるくは小さくうなずき、夕方の道をまっすぐ歩いていきました。

もなかは少しだけ、その後ろ姿を見送りました。

今日、会ったばかり。

なのに、もう少し一緒にいたかった。

「……これって、もう友達かな？」

もなかはひとりで笑って、自分の帰り道を歩き出しました。

# 奥付

## くまみる日和

### 第2話「運命の転校生」

作・原案・構成

野山 あお

キャラクター・世界観設計

野山 あお

発行

くまみる工房

初版発行

2026年8月13日

改訂版発行

2026年8月31日

© 2026 野山 あお

All Rights Reserved.

本作品の無断転載・複製・改変・再配布を禁じます。